**史跡　二ツ森貝塚**

青森県小川原湖から数キロ西にある二ツ森貝塚には、紀元前3,500年～紀元前2,000年にかけて、複数の集落が存在していました。この遺跡の随所で、150近くの竪穴建物跡と、複数の貝塚があった証拠が発見されました。この遺跡では復元竪穴建物が2棟建設されており、シカの角から作られた装飾具などの出土品は、近くの二ツ森貝塚館 [リンク] に展示されています。

*集落の規模と配置*

駐車場付近の展望台からは貝塚を見渡すことができ、地図には集落の配置が図解で説明されています。二ツ森貝塚の集落は大規模なもので、集落には、墓地、集めた食料を貯蔵する穴、貝塚とともに、土器や石器などの道具を廃棄する場所がありました。

*環境が変化した証拠*

紀元前3,900年頃、二ツ森貝塚は、大きな湾を見下ろす位置にあったのでしょう。何世紀もかけて、海面が下がって海岸線が遠ざかり、湾は小川原湖（汽水）になりました。これらの環境の変化は、貝塚の中の貝殻の種類と分布から観察できます。より下の層には、カキ、ハマグリ、および海に住むその他の貝の殻が含まれています。いっぽう、 より上の層には、ヤマトシジミなど、汽水に住む種の貝殻が含まれています。

*生存のための活動*

また、貝塚には、魚、ハクチョウ、カモ、シカ、イノシシの骨も含まれています。これが示すのは、この集落の住人が、貝類を集めるとともに、狩りをし魚を獲っていたということです。クリを保存するのに使われることが多かった貯蔵穴の存在は、住人が森で食料の採集も行っていたことを示唆しています。

*関連遺跡*

北日本において、その他の集落跡は、三内丸山遺跡 [リンク]（青森）、御所野遺跡 [リンク]（岩手）、および大船遺跡 [リンク]（北海道）で発見されています。